

使徒の働き17章1－9節「妬みを抱かせる福音」

1A 「このイエスこそキリスト」 1－3

1B 会堂へ向かう一行 1

2B 三回の安息日 2

3B 苦しみを受けられるキリスト 3

2A 町の暴動 4－9

1B 信じるギリシア人たち 4－5

2B 広場への引きずり出し 5

3B 転覆の告発 6－9

1C 世界を騒がせてきた者 6

2C カイサル以外の別の王 7

3C 群衆と役人の動揺 8－9

本文

使徒の働き 17 章を開いてください。私たちは、前回、パウロたちの欧州での初めての宣教、ピリピにおける宣教を見ました。今晚は、次の町、テサロニケにおける宣教を見ていきます。

1A 妬みに駆られるユダヤ人 1－9

1B 「このイエスこそキリスト」 1－3

1C 会堂へ向かう一行 1

¹パウロとシラスは、アンピポリスとアポロニアを通して、テサロニケに行った。そこにはユダヤ人の会堂があった。

パウロとシラスは、エグナティア街道を歩いて西に向かっています。アンピポリスという町は、ピリピから 60 キロ、大きな町ですが特に宣教らしきことはしなかったようです。そしてアポロニアは、さらに西に 40 キロです。ここでも通過しただけです。そして、西に 55 キロ進むとテサロニケに行きます。

なぜ通り過ぎたのか？そこに、「ユダヤ人の会堂があった」とあります。そうです、パウロの一行はユダヤ人の会堂、シナゴグのあるところを求めて西に向かっていました。パウロたちは、初めにユダヤ人たちに語るべきことを知っていました。「ロマ 1:16 私は福音を恥としません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。」主イエスが、そうであったように、まず福音はユダヤ人に与えられるべきです。福音というのは、聖書の約束の基づくものです。聖書が与えられているユダヤ人だからこそ、福音を理解することができます。

そしてパウロは、自分では意図していなかったけれども、神のご計画の中で、ユダヤ人の妬みによって福音が広がっていくのを、知っていたのだと思います。「ロマ 11:13-14 そこで、異邦人であるあなたがたに言いますが、私は異邦人への使徒ですから、自分の務めを重く受けとめています。14 私は何とかして自分の同胞にねたみを起こさせて、彼らのうち何人かでも救いたいのです。」彼が、ユダヤ人相手にシナゴグで福音を語ると、ユダヤ人で信じる人たちよりも、その周囲のいる改宗者や、神を敬う異邦人たちがかえって、信じていくのを見ていきました。その中で、ユダヤ人たちが妬むのです。実はそのことが、神のご計画の中に隠されていたのを知っていきました。

テサロニケの町に付いて、背景を説明します。ピリピの町はローマの植民都市であったのに対して、テサロニケの町はギリシア時代に始まった自由都市でありました。自主憲法を定め、自治が認められていて、選挙で選ばれた人々による議会政治もありました。さらに、自分の貨幣を鑄造することもできたのです。

この町は、アレクサンドロス大王の総督の一人、カッサンドロスによって造られ、自分の妻であって、アレクサンドロスの異母妹であるテッサロニカに因んでその名前を付けました。ピリピの歴史で言及しました、ローマの内戦であるフィリッピの戦いで、テサロニケはオクタウィアヌス(アウグストス)に付いたので、その戦いの後に自由都市の特権を得ることが出来ました。その伝統が続き、パウロたちが宣教に来た紀元一世紀の時も、皇帝カエサルに対する忠誠心は強烈なものでした。

また、ローマ時代に、エグナティア街道の要衝の町として大いに栄えました。港町でもありますから、海ともつながっています。しかし、パウロたちがここに来る前に、大きな地震が起こったそうです。人々は失意と苛立ちの中にいたそうです。私たちがここを訪れたのは 2018 年ですが、似たような空気を感じました。今の町テッサロニキは、首都アテネに次ぐ第二の都市です。けれども、経済破綻の影響は数年経った後でも色濃く残っており、町の半分の建物は廃墟になっているような雰囲気でした。大きな都市であり、誇りをまだ失っておらず、それゆえ失意と苛立ちの中にいるという空気が、テサロニケの新しい信者たちが受ける困難と無縁ではないと思います。

2C 三回の安息日 2

² パウロは、いつものように人々のところに入って行き、三回の安息日にわたって、聖書に基づいて彼らと論じ合った。

「いつものように人々のところに入って行き」と言っています。これが、彼の伝道です。私たちも、一般の人々の間に入るのです。自分たちの間に人々を招くことも伝道ですが、逆に、不信者の中に入っていくことも必要です。

そして、「三回の安息日にわたって」と言っています。テサロニケ人への手紙は、この短い期間

が背景となって、パウロが彼らに手紙を書いたのが分かります。三週間前後だったのです。そこで、テサロニケの信じたばかりの人たちがとても気になっていて、ようやくテモテを遣わしてどうなっているのかを知って、手紙を書いたのがコリントからでした。それが、テサロニケ人への手紙です。パウロの手紙の中で、最も早く書かれた最初の手紙です。新しく信じたばかりなのに、それでも困難に耐え忍び、愛の労苦、信仰の働き、イエスが戻って来られる希望について、その地域一体に噂が広まっていました。

3C 苦しみを受けられるキリスト 3

³ そして、「キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならなかったのです。私があなたがたに宣べ伝えている、このイエスこそキリストです」と説明し、また論証した。

私たち日本人にとって、「キリスト」とは馴染みのない呼び名です。けれども、キリスト、ヘブル語でメシアは救世主のことであり、世界を救われる使命を帯びた存在として、聖書で一貫して約束されていることです。創世記で、アダムが罪を犯した直後に、女の子孫が蛇の子孫の脳天を打ち砕くという約束から始まり、詩篇 22 篇には、詳細に十字架の上での苦しみが預言されていて、イザヤ書 53 章には、我々の咎のためにこの方が傷を負われたという預言になっています。その上で、よみがえっているメシアの姿があるのです。詩篇 22 篇も、イザヤ 53 章も、苦しみのメシア、キリストだけでなく、その後の、よみがえっているメシアの姿を描いています。

ルカによる福音書で、よみがえられたイエスが、エマオに向かっていた弟子たちに、こう言われました。「ルカ 24:25-27 そこでイエスは彼らに言われた。「ああ、愚かな者たち。心が鈍くて、預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち。26 キリストは必ずそのような苦しみを受け、それから、その栄光に入るはずだったのではありませんか。」27 それからイエスは、モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされた。」同じようにパウロも、聖書を信じている、これらユダヤ人に対して、同じようにキリストが苦しみを受け、それから栄光に入ることを論証していったのです。

ここで弟子たちに対して、主は、「預言のすべてを信じない」ことを咎めておられますね。預言は信じていたのですが、すべてを信じていなかったのです。一部しか信じていなかったのです。メシアは、栄光と力をもって来られて、諸国の力を打ち砕くことを信じていました。けれども、聖書には、栄光と力で来られるメシアだけでなく、苦しむメシアの姿が克明に描かれています。その部分については、無意識に、また意図的に素通りします。あるいは比喩的に解釈します。しかし、そのまんま、預言は受け取るべきなのです。

ユダヤ人のかつての誤りについて、私たちキリスト教会も同じように誤りを持っています。それは、キリストが栄光と力をもって来られることについて、これも比喩的に解釈していききました。かつ

て戦前の日本の教会には、政府が圧力をかけてきたので、「再臨は、心の中でイエスが王となることです」と言って、再臨を霊的なものであり、文字通りではないと言い逃れました。そして今の教会でも、再臨について語るのを避ける傾向があります。また、再臨についての預言の多くを霊的に解釈する考えも、流通しています。預言のすべてを信じないという同じ過ちなのです。

2B 町の暴動 4-9

1C 信じるギリシア人たち 4-5

⁴ 彼らのうちのある者たちは納得して、パウロとシラスに従った。神を敬う大勢のギリシア人たちや、かなりの数の有力な婦人たちも同様であった。

「彼らのうちのある者たちは納得して」とありますが、聞いていたユダヤ人の多くは、納得しませんでした。パウロが、ユダヤ人が苦しむキリストについて、つまずきになっていることを、コリント第一で説明しています。「Ⅰコリ 1:22-24 ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシア人は知恵を追求します。23 しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えます。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かなことですが、24 ユダヤ人であってもギリシア人であっても、召された者たちにとっては、神の力、神の知恵であるキリストです。」

キリストであるならば、十字架から降りてみろ、と人々があざけったように、ユダヤ人は、しるしを求めました。だから、つまずきなのです。けれども、ある者たちが納得したと言っているように、信じる人たちは信じるのです。パウロは、そのことを期待しました。多くがつまずいても、主が選ばれた者たちがその中にいる。その人たちにとっては、キリストの十字架こそが、神の力なのだと知るのだから、ということです。私たちもそうですね。日本人にとって、つまずきや、あざけるような内容を、キリストの十字架は含んでいます。けれども、信じる者には救いをもたらす力です。

そして特徴的なのは、「神を敬う大勢のギリシア人たちや、かなりの数の有力な婦人たち」です。先に話したように、テサロニケはギリシア文化の濃厚な町です。大半が土着のギリシア人でした。そしてユダヤ人の会堂、シナゴグには、ギリシア人であるけれどもユダヤ教の神を敬う人々がいました。その彼らが大量に信じたのです。

中でも特質なのは、「かなりの数の有力な婦人たち」です。ギリシア社会では、相続する子を宿す正妻の他に、一緒に同伴する愛人がいて、さらに、性欲を満たすだけの娼婦というのが当たり前になっていました。けれども、ユダヤ教の中では女性の尊厳を守る戒めが多くあります。ですから、婦人がたくさん集まっていたのです。

さらに、イエスは、ユダヤ人のラビとしてその律法を精神を体現しました。姦淫の現場で捕らえられた女でさえ、彼女が悔い改め、真っ当な生活ができるように、その罪を赦し、婦人よと丁寧に

呼びかけたのです。ですから、女性が多く信じて行き、その後の初代教会にも女性や子供たちが多く教会に集うようになりました。しかも、ここでは有力な婦人たちです。有力者たちの妻ですね。彼女たちが信じ始めたので、ユダヤ人だけでなく、社会構造に触れるこの動きに、役人たちの心も揺るがすことになります。

2C 広場への引きずり出し 5

⁵ところが、ユダヤ人たちはねたみに駆られ、広場にいるならず者たちを集め、暴動を起こして町を混乱させた。そしてヤソンの家を襲い、二人を捜して集まった会衆の前に引き出そうとした。

ユダヤ人たちが「ねたみ」しました。ギリシア人が大勢、信仰を持ったことです。彼らが改宗して、それで救われると信じていたのに、そのまま信じ、受け入れられていきました。これが到底許されなかったのです。異邦人をも受け入れる神の恵み、その気前良さがあまりにも大きいので、それが許せないと思ってしまうのです。

イエスが、ナザレのユダヤ人から妬まれたことがありましたね。会堂で、イザヤの預言を読み、それはメシアについての預言ですが、今、これが実現したと言われた後に、彼らが信じませんでした。それで、預言者エリヤも、エリシャも、ユダヤ人ではなく、異邦人を癒した話をしました。エリシャはナアマンです。エリヤは、シドンのやもめです。このように、自分自身にその大らかさ、気前良さは、都合がよすぎるとして受け入れないようにさせてしまいます。けれども、そのままのあなたが受け入れられるのです。悔い改めの、へりくだりの心で神に近づけば、そのまま受け入れられるのです。そして罪が清められ、心が一新されます。

そして、「広場にいるならず者たち」とありますが、広場というのはアゴラのことです。市場があったり、人々の集会があったり、行政的なことも行われます。そこにまた役人たちが裁判をする席、ビーマもあります、そして、たむろっていた、ならず者たちもいます。妬んだユダヤ人たちは彼らに話しかけて、何か事を起こさせる、騒動を起こしたのです。

けれども、この動きを察知した、新しく信じたテサロニケ人たちが、パウロとシラスをヤソンの家から逃がして、匿ったのでしょう。もともと二人はヤソンの家にいたと思われます。ヤソンは、ギリシア系のユダヤ人です。二人がその家にいることを知って、捜しに行ったらいなかったの、彼とその家族を襲って、「会衆」の前に引き出したのです。ここが自由都市であることを思い出してください、民主主義があるので、会衆の前に出すのは、彼らが民の前で裁くためでした。

3C 転覆の告発 6-9

1D 世界を騒がせてきた者 6

⁶しかし、二人が見つからないので、ヤソンと兄弟たち何人かを町の役人たちのところに引いて行

き、大声で言った。「世界中を騒がせてきた者たちが、ここにも来ています。

これは、すごい告発です。「世界中を騒がせてきた」と言っています！もちろん、そんなことをパウロの一行はしていません。良心的なローマ市民としてパウロたちが生きています。

けれども、霊的には、それだけの激変をもたらしていると言ってよいでしょう。信じないユダヤ人たちは、イエスがこのキリストであると主張していることは、これまでの世界の秩序を揺るがしかねない根本的な変革だと分かったのでしょう。少なくとも、自分自身は、キリストにあれば新しく造られなければいけないことも、分かったのでしょう。自分の人生を根底から変え、また世界が根底から変えられるのですから。

なぜ、これまで歴史の中で何の力もないキリスト者たちが、国の権力によって迫害されていったのか？キリストは王の王、主の主であります。人の人生も世界も、いつかはキリストご自身に服さないといけないのです。それを初めに行ったのが、キリスト者です。自分の人生と生活をイエスの主権に引き渡したのです。そのことを薄々知っているからこそ、何の力を持っていないはずのキリスト者に迫害の矛先を見せます。

世界には、それぞれの場所で社会や宗教の体制があります。例えば、インドにおける教会に対する迫害は、カースト制をキリスト教が揺るがすからです。カースト制は階級制です。しかし、福音が不可触民と呼ばれる、最下位の人々に広まります。その人たちに教会が教育を施します。そうすると、体制が崩されると恐れて、過激に攻撃してくるのです。

日本では、檀家制度ですね。家が、初めからお寺に登録されています。その家はすべて、その寺に属する仏教徒です。墓は、その寺の敷地にあります。この体制が、たとえ今は緩くなっていると言っても、人々の心の奥底に植え込まれています。この制度こそが、キリシタン撲滅のために作られたものでした。だから、キリシタン、あるいはキリスト教の信仰を持つならば、この制度に挑戦してしまうという恐れを、潜在的に持つしまうのです。

2D. カイサル以外の別の王 7

⁷ヤソンが家に迎え入れたのです。彼らはみな、『イエスという別の王がいる』と言って、カエサルの詔勅に背く行いをしています。」

これは、恐ろしい告発です。ピリピの時は、ローマの慣習を変えてしまう、我々をユダヤ化させようとしてしまうというものでしたが、こちらはローマ帝国の転覆を企てている反逆罪です。イエス様が十字架刑の処せられた時の罪状です。

3D. 群衆と役人の動揺 8-9

⁸ これを聞いた群衆と町の役人たちは動揺した。⁹ 役人たちは、ヤソンとほかの者たちから保証金を取ったうえで釈放した。

この告発は、ユダヤ人たちの入れ知恵だったのでしょうか、さすがにやりすぎでした。テサロニケは皇帝に忠誠を誓っていました。それゆえこの告発は怒りを通り越して恐れになりました。ちょうど、ピラトがイエスを裁いている時に、十字架につけろという訴えを聞いて、恐れてきたのと似ています。こんなことが我が町で起こったことになれば、とんだことになると思いました。それで役人はかえって慎重になりました。ヤソンとその他の者たちが、本当にそんな罪を犯しているのか、証拠が十分になれば裁けないと判断したのです。それで保証金を取っただけで釈放しています。

そして、10 節には、「^{10a} 兄弟たちはすぐ、夜のうちにパウロとシラスをベレアに送り出した。」とあります。パウロとシラスを匿っていたのですが、送り出したのです。

テサロニケ人への手紙第一には、パウロがどれだけ彼らのことを心配しているか、詳しく書かれています。わずか三週間ぐらいの期間しかいなかったのですから、教会に長老を建て上げる時間もなくて行きました。サタンが彼らを惑わして、信仰の実を摘み取ってしまうのではないかと心配でした。パウロは、そこでアテネにいる時にテモテをテサロニケに遣わします。すると、彼らはひどい困難の中にいましたが、それでも信仰の働きと、愛の労苦と、イエス・キリストを望む希望で満たされていたのです。

ところで、ここテサロニケにいる間に、パウロはピリピの教会から、二度も支援を受け取っていました。「ピリ 4:16 テサロニケにいたときでさえ、あなたがたは私の必要のために、一度ならず二度までも物を送ってくれました。」ピリピの人たちの間で始まった、良い働き、神の働きです。

こうして、かなり騒がしい中で宣教の働きが中断したかに見えました。しかし、着実に実が残りました。私たちが、世間を騒がしてしまうことを恐れて、福音のゆえに前に出るのを恐れなくてください。出ましょう、必ず実が結ばれます。「ヨハ 15:16 あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命しました。それは、あなたがたが行って実を結び、その実が残るようになるため、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものをすべて、父が与えてくださるようになるためです。」